

Jクラブのホームタウン活動が地域へ与える影響に関する研究

OH Onyou

研究背景と目的

1980年代における日本の経済は「金ぴか時代」と呼ばれたが、1980年代後半から1990年代序盤にかけてバブル経済が崩壊し、企業はもちろん地方自治体では不況に陥った。その影響によりトップスポーツを担っていた企業スポーツは限界を見せ、特に地方自治体では地域創生や地域活性化を図るためのまちづくりが活発化した。そこで、Jリーグは地域の核として発足し、地域振興や地域スポーツ文化の定着を謳っている。その実現に向けたJクラブのホームタウン活動が社会的に注目されているが、その評価はそれぞれ異なる。

本研究では、ホームタウン活動の歴史的な研究および事例研究からJクラブのホームタウン活動の有効性や可能性、課題を明らかにすること、また、今後におけるJクラブのホームタウン活動の在り方を示唆することを目的とする。

研究方法

本研究では、時間的範囲をJリーグ発足前の1970年代から現在までにし、空間的範囲に地域やJリーグ、Jクラブを基礎としてホームタウン活動に関わる諸機関を設定した。こうした設定のもと、文献調査およびフィールドワーク調査を行った。

主な分析対象はJリーグやJクラブ、行政であり、その分析を行う際に用いた資料は先行研究をはじめ、Jリーグ発足に関わった人物の自叙伝やJリーグおよびJクラブ資料、スポーツ専門紙、行政資料、各種機関の発行物、新聞記事などである。

こうした資料からJクラブのホームタウン活動に対する地域での評価や課題を検討し、Jクラブのホームタウン活動を地域活性化に結び付けて分析する。

本論の構成

第1章では、1970年代から1990年代までの地域スポーツ政策を検討し、地域スポーツ環境の実態を明らかにする。

第2章では、Jリーグの発足過程を検討し、Jリーグにおける地域をめぐる施策の展開や変遷を明らかにする。

第3章では、Jリーグの理念「百年構想」や活動方針を検討し、それらが持つ意味を明らかにする。

第4章では、Jクラブが行うホームタウン活動の変遷を分析し、各時期におけるホームタウン活動の課題を明らかにする。

第5章では、ホームタウン活動を充実に行い、地域密着に成功した川崎フロンターレのホームタウン活動を分析し、その活動の地域浸透の程度や地域における活動への反応を明らかにする。

第6章では、理想的な地域密着型クラブとして評価される松本山雅FCのホームタウン活動を分析してその活動の地域浸透の程度や地域における活動への反応を明らかにする。

最後に、本稿の到達点を示したうえで、今後のホームタウン活動の在り方を示唆する。

結論

Jリーグの地域を核とした発足は当時のバブル経済崩壊により不況に陥った地方自治体と企業スポーツの限界を目の当たりにしたJリーグの互いのニーズが合致したものである。そのために設定したJリーグの理念は地域振興や地域スポーツ文化の定着が中心となっているが、それは既にスポーツ振興法で定められているものであり、スポーツ団体の義務や責任である。こうしたJリーグ理念の実現に向けたホームタウン活動は全クラブが多分野にわたって行っている。

しかし、Jクラブから行政へのホームタウン活動に対する連携や協力要請が足りなく、行政のJクラブのホームタウン活動に関わろうとする姿勢も消極的であった。こうした状態では、ホームタウン活動が地域の課題やニーズを正確に把握した活動であるとは言い難い。

一方、川崎フロンターレや松本山雅FCでは地域の課題や現状を正確に把握し、行政や関連団体との緻密な連携・協力によりホームタウン活動を行っている。それにより、連携・協力先から各活動における専門家を招いて活動を進めていると同時に、単調な活動に留まらず豊富な内容を展開している。例えば、環境活動に活動関連の知識習得や学習効果などの要素を入れたり、算数教育活動に体験学習を入れるなどの工夫があった。こうした活動は地域のまちづくり政策やスポーツ振興計画に貢献している可能性が高く、地域住民の評価も高かった。しかし、活動の範囲や回数に課題が残されている。

したがって、今後のホームタウン活動は①地域の現状や課題、特徴を正確に把握し、②行政や関連団体との連携を充実にする、③活動の内容を豊富なものにすることが望ましいと考える。さ

2020 年度社会学研究科修士論文タイトル及び要旨

らに、この3つに沿った活動を定期的かつ持続的に行わなければならないと考える。